

複文の従属度に関する考察

主節のモダリティを中心にして

加藤 陽子

国際大学

日本語プログラム

要旨

本研究は、述語の連用形や接続助詞で結ばれた二つの節を持つ接続節の複文を、従属節の主節に対する依存の程度（従属度）によって分類した。その際、主節末のモダリティのスコープを従属度を測る指標とした。対象とした接続節の複文は、南(1974)で取りあげられたものを主とし、必要な場合は下位分類を行った。本稿では、条件節を例にモダリティスコープの判定方法等を述べた。

その結果、複文は三つに分類され、南(1974)の結果との比較で、大まかな部分において従属度の判定が一致していることがわかった。また本稿では、従属度のスケール上に並んだ各接続節の意味のまとまりを指摘し、この意味のまとまりが存在する要因を複文の機能的・意味的な側面に求め説明を試みた。ここから、接続辞が形態的に同一でも、実現する節の関係の意味が違えば従属度が異なったものになる可能性があることも指摘した。

1. はじめに

南(1974)による文の階層性についての先駆的な研究では、接続節の複文は、主に従属節の内部に収まる文法的カテゴリーの種類とその量を調べることによって、従属節の主節に対する依存度（以下「従属度」）の高低の観点から四つに分けられている。この研究によれば、接続節の複文は、従属度の高い「ナガラ、ツツ」に代表されるA類と呼ばれる複文のグループから、従属度が低くそれぞれの節が一文に近いようなふるまいを見せる「ガ・カラ」等に代表されるC類と呼ばれる複文のグループに分けられ、その外側に話し言葉に特徴的な要素を含んだD類と呼ばれる階層が存在し、これらが段階的に位置づけられる。そしてこの段階は、日本語の文のよりdictum的なものからmodal的なものまでの階層構造を反映している。この研究は、田窪(1987)等によって部分的な修正がなされたものの、渡辺(1953)金田一(1953)林(1960)等の研究に一致・共通しており、日本語の述語文の階層性及び各段階の認定については、ほぼ一致した理解が示されていると考えて良い。

本稿では、この南(1974)の研究を基礎とするが、従属節内だけでなく主節も考察の対象に入れ、主節末のモダリティのスコープを従属度を測定する指標とすることにより、以下の三点を主張する。（括弧内は、中心的に論述した節の番号を表す）

1. 複文の主節末に位置するモダリティのスコープの広狭は、その複文に於ける従属節の主節に対する従属度を反映している。（9節）
2. 「従属度」と、「従属節と主節が実現する関係の意味」との間には関連した関係

が認められる。従って、同一形態を使って複数の関係的意味を実現する複文は、意味毎に異なった従属度を持つ可能性がある。またこのことは、異なる形態を持った接続辞からなる複文でも、実現する関係的意味が同様であれば、従属の程度が近いものになる可能性を示す。(10節)

3. 複文の従属度には、節同士の機能的・意味的な関係が反映されている。(11節)

2. 本稿の枠組み

南(1974)では、従属度によって、従属節(南(同)では従属句)に現れる文の構成要素に違いが見られることが述べられている。例えば、従属度の高いA類に属する複文の従属節は、状態・程度副詞、補語、及び述語を主な構成要素とする。また、A類より従属度の低いB類では、A類に現れた要素に加えて、主節とは別の、評価的意味の修飾語や主格、否定辞や時制を表す語をとることができる。

このことから、従属節に現れ得ない要素は、主節に現れた同種の要素に依存(言い換えれば、主節と共有)していると推測できるかもしれない。しかし、主節から従属節を観察した場合、果たして同じ推測が成り立つだろうか。従属度の異なる複文間において、従属節に対して主節が担う役割の量はどのような違いを見せるのだろうか。特に、命題と共に文を作る重要な要素である主節末のモダリティ成分は、複文の従属度にどのように関わっているのか。

現在までは、以上の問いに答え得るような主節と従属節との関係から従属度を説明する議論は次節で述べる三上(1959)以外、あまりなされてこなかったように見受けられる。そこで本稿は、従属節のみならず主節も考察の対象に含めることにより、複文の全体を見渡し、従属度を考察したいと考える。では、次節で、本稿の枠組みの基礎となった三上(1959)について概観する。

3. 研究の観点

従属度と主節末のモダリティとの関係を述べたものに、中立法(用言のテの形・連用形にあたるもの)をとりあげた三上(1959)がある。この研究では、複文は単式、複式(軟式・硬式)、遊式、に四分されている。この中で中立法は単式と認められ、主節への係り方の弱さを説明するために「ムウド同化」という現象が指摘されている。

- (1) 京都へ行ッテ、都踊リヲ見物
- { スレバ、
シタ。
セヨ。
- (三上(1959:168))

これは下線部の「行ッテ」が、主節の「見物し」の活用次第で、「行けば」「行った」「行け」などのように、主節末のムードと同一になる(同化する)というものである。この「ムウド同化」は、中立法の分析のみに用いられたものであるが、この、主節末のモダリティがどこまでの命題までを同じモダリティでくくることができるか、という観点は、

複文全体の従属度を測る手段として有効だと思われる。つまり、「主節末にあらわれるモダリティがどの範囲の命題をスコープとするか」が従属度に関連すると考えるのである。

このように考えると、複文は、主節末に付くモダリティのスコープの広狭によって二つの構造に分けられ、この二つの構造が、従属度の違いを反映していると予想できる。これらの構造とは、以下の(2)(3)のようなものである(以下、スコープを[]で表す)。

(2) [資料を読みながら話を聞k] i なさい。

(3) ぼくは行かないが[君は行k] e。

(2)のような複文は、主節の命題と従属節の命題が一まとまりになって主節末のモダリティのスコープに入るため、従属節の従属度が高い複文であると言える。一方、(3)では、従属節の命題は主節末のモダリティの作用を受けないため、従属節は主節から独立した形となっている。つまりこのような構造を取る複文は従属度が低いと言える。(2)の構造を α 構造、(3)の構造を β 構造とすると、従属度の高い複文は α 構造、低い複文は β 構造をもち、従属度は構造に反映しているのではないかと予想できる。このような予想に基づき、7節以降では、主節末に位置するモダリティのスコープを観察する。

では、その前に次節でモダリティのスコープによる複文の構造の判定基準を述べる。

4. スコープ判定の基準

本稿ではモダリティスコープを判定する基準として次の二つを考える。

A. 両節末に位置できるモダリティの形態的な制約を基にした「形態的基準」

B. 文脈の情報や統語的なテストを基にした「意味的基準」

Aの「形態的基準」は、主節末・従属節末にどんなモダリティが形態的に位置可能または不可能かを観察するものである。上記の例(2)では、ナガラを含んだ複文の主節末に「ナサイ」という命令のモダリティが位置できることがわかる。一方以下の例(4)では、従属節末に「カモシレナイ」というモダリティが位置している為、文法的に許容度の落ちる文(以下*で示す)になっている。しかし、(4)と同種類の節末のモダリティをとっているが、「ガ」を接続辞とする(5)では、(4)とは違い許容度の落ちる文にはならない。また(5)のスコープを観察すると、主節末のモダリティ「なさい」が主節の命題を、従属節末のモダリティ「かもしれない」が従属節の命題をそのスコープとする β 構造になっている。

* (4) お菓子を食べる~~かもしれない~~ながら話を聞き~~なさい~~。

(5) [ぼくは行かない] ~~かもしれない~~が [君は行き] ~~なさい~~。

このように、節末にモダリティ形式の形態的な位置が可能か、という点をスコープ判定の一つの基準とし、まず明確に形で見える形態的基準によって、大まかなスコープの範囲、及び従属度を判定する。南(1974)では、意志形(「～ウ・ヨウ」)や推量形(「ダロウ」)等の限られた種類のモダリティについては考察がなされているが、本稿では考察の対象とするモダリティの種類を以下6節で挙げるように広げ、従属節末のみならず主節末についてもモダリティの位置が可能かを考察した。この「形態的基準」による判定結果は紙幅の都合上、結果のみを9節表3の「形態的基準」の項に示した。

一方、Bの「意味的基準」で考えたいのは、(6)のような場合である。

(6) 彼が来 たら 連絡し なさ。

Aの形態的特徴のみを唯一の基準として、モダリティスコープを判定するなら、従属節末に何らかのモダリティが位置可能か否かで、 α 構造・ β 構造が一義的に決まってしまう。しかし実際は、形態的に従属節末にモダリティ成分の位置が可能な複文でもいつも従属節末にモダリティが位置しているわけではない。「たら」という接続辞は、従属節末に「らしい・ようだ」等のモダリティ成分の位置が形態的に可能である。しかし(6)の例では、それが位置していない。このように、従属節末に何もモダリティ成分が位置していない時の主節末のモダリティのスコープはどうなるのだろうか。ここでは、主に実例から用例を採集し、文脈からの情報や文法的なテストを基にしてスコープを判断した。この意味的基準による構造判定の結果は、9節表3「意味的基準」の項に記した。また、この意味的基準によるスコープ判定は、7節で条件節を例に詳しく述べる。

5. 分析の対象

本稿では、南(1974)であげられた以下の接続助詞等(本稿では「接続辞」)を含む複文を分析の対象とし、節を二つ持つものを中心に考察した。括弧内に南(1974)の意味的なラベリング等を示す。

- A類 ナガラ(継続; 以下、ナガラ1)、ツツ、テ1(動作の様子)、連用形反復、連用形1(動作の様子; 形容詞・形容動詞述語のもの)
- B類 テ2(継起的または並列的な動作・状態)、ナガラ(逆接; 以下、ナガラ2)、ト、ノデ、ノニ、バ、タラ、ナラ、テモ、テ3(原因・理由)、連用形2(意味はテ3に同じ)、ズ(ズニ)、ナイデ
- C類 ガ、カラ、ケレド、シ

ただし、南(1974)と本稿の分類とは全く同じというわけではなく、本稿では、南(1974)で述べられた接続辞のうち、幾つかのものには下位分類を行い、考察した。条件節の下位分類は7節で述べるが、それ以外の接続節の下位分類は以下の通りである。(注1)

- シ = 「並列のシ」と「理由取り立てのシ」に下位分類
- ガ・ケレドモ = 「逆接のガ(ケレドモ)」と「前置きのガ(ケレドモ)」に下位分類
- テ1・連用形1 = 付帯状況を表すもの
- テ2 = 継起的な事態発生を表すもの
- テ3・連用形2 = 因果関係または理由→帰結関係を表すもの
- テ4 = 意味的なセット(統括命題)に属する要素の並列的配列を表すもの
- テ5 = 発言のモダリティを表すもの

6. 対象とするモダリティとその分類

本稿ではモダリティを「発話者の、発話時の、命題をどのように捉えるかという心的態度」と定義し、仁田(1991)をもとに下記のように二分し、考察の対象とする。(注2)

- (a)判断のモダリティ
命題に対する発話者の断定・推量などの知覚的な判断をあらわすもの。
するゆ（確言・断定）、～ダロウ、～マイ（否定推量）、～ニチガイナイ、～カ
モシレナイ、～ラシイ、～ヨウダ、～ソウダ（様態）、～ミタイダ、～ハズダ、
～モノダ、（～ワケダ／～ノダ）
- (b)実現期待のモダリティ
発話者が聞き手に働きかけて行動を起こさせたり、発話者自身の意志や希望等を
表明したりするもの。命題の実現に対する期待を共通要素として持つ。
（し）ロ・～ナサイ、～テクダサイ・～テ、（する）ナ、～ヨウ・するゆ（意
志）、～マイ（否定意志）、～ヨウ（勧誘）、（～タイ（希望））

7. モダリティのスコープ……………条件節を例に

7・1 条件節の下位分類

ここでは、4節で述べた、モダリティスコープの「意味的基準」による構造判定を、
条件節を例にして述べる。本稿では、南(1974)であげられた「ト・タラ・ナラ・バ」の四
形態を、以下の三点の基準から表1の①～⑦に分け、従属度を測定することにする。

- (a)従属節の命題と主節の命題との間の「原因→結果」の因果関係、もしくは「理由
→結果」の関係（表中 $p \rightarrow q$ と表示）の成立の有無。
- (b)従属節の命題が実現しなかった場合、つまり条件が成立しなかった場合のことが
考慮されている「仮定的な条件」か。もしくは、条件は必ず成立し、成立に疑い
の余地のないもの（表中「必成立」）、或は発話の時点で既に成立してしまっ
ている（表中「成立済」）「既定的な条件」か。
- (c)主節末に位置できるモダリティに形態的制限があるか。（注3）

		$p \rightarrow q$ の関 係	条件不成立時 の考慮	主節末モダリティの制限 判断	実現期待	条件形
①	恒常条件	原因→結果	なし；必成立	確言非過去	×	$\Lambda \cdot \text{ト}$
②	仮定条件	理由→結果	あり	○	○	$\Lambda \cdot \text{タラ・ナラ}$
③	時	理由 (時間的起点)→結果	なし；必成立	○	○(「ト」はx)	タラ・ト
④	理由	理由→結果	なし；成立済	確言・過去	×	タラ・ト
⑤	発見契機	なし	なし；成立済	確言・過去	×	タラ・ト
⑥	慣用表現	なし	なし	○	○(「ト」はx)	$\Lambda \cdot \text{タラ・ト}$
⑦	発言モダリティ	なし	なし	○	△	$\Lambda \cdot \text{タラ・ナラ・ト}$

表1

このように条件節を意味的に下位分類するには理由がある。条件節は「ト・タラ・
ナラ・バ」と、形態は四つであるが節と節の関係により様々な意味を実現する。また、こ
の四つの使い分けは複雑で、豊田(1985)でも、各人で使われる条件節の許容範囲に差があ
ることが報告されている。従って、実現する様々な意味を捨象した形態的分類で従属度を
はかるのではなく、条件文を成立させる意味的側面も加味して分類し、従属度の差異を記
述することも必要だと思われる。

以下では、このように下位分類した条件節のそれぞれについて、4節のBで述べた

「意味的基準」を使って、主節末のモダリティスコープを観察して行く。

7. 2 各条件節の意味と構造

7. 2. 1 恒常条件

- (7) 春になると桜が咲きます。(接続:6)
(8) 2に2をかければ4になる。(接続:1)

恒常条件に属する文は「条件→帰結関係を表す」というより、一般的真理や抽象的論理関係を条件の形で表現したものと捉えられる。このような意味特徴を持つため、これらは両節末のモダリティ制限が最も強く、従属節末に「らしい・そうだ」等の推量を表すモダリティが一切付かない上、主節末にさえ確言以外のモダリティを位置させることはできない。このことは、恒常条件を表す複文が、節末のモダリティが入る余地がない、命題同士が緊密に結び付いた構造を持っていることを表している。従って（確言以外の判断のモダリティはつかないが、それがついた時には）構造は α となる。また、実現期待のモダリティは節末に位置できないため、構造の判定はできない。

7. 2. 2 仮定条件

- (9) うまくもちこたえていけば、このまま結婚にすべりこむことができるかもしれない。
（ココア：191）
(10) これが本当の話なら、使えそうだけど……（セーラー：216）
(11) ここのうちへ養子に来たら始末うまいもん食えてお金あって楽だろうね。
（太郎：297）

(9)～(11)は判断のモダリティが主節末についた例である。（以下部は主節末のモダリティを表す）(9)では、以下の(9)'の様にスコープを書き表すことができる。

(9)' [うまくもちこたえていく→このまま結婚にすべりこむことができる]

仮定的な条件では、従属節の命題は未実現である。従って、主節末の推測のモダリティが作用するのは $p \rightarrow q$ という論理の流れを持つひとまとまりの命題である。 $p \rightarrow q$ という関係を持つ命題全体に対して「カモシレナイ」と推測しているのである。これは下記の(9)"のような、「うまくもちこたえていく」という従属節の命題が「このまま結婚にすべりこむことができるかもしれない」という、話者の推測を含んだ主節全体に対する条件になる構造をもっているのではない。

* (9)" うまくもちこたえていく→[このまま結婚にすべりこむことができる]
このことから構造は α と認定できる。

次に、例(12)～(14)で実現期待のモダリティが主節末についた時の構造を考察する。

- (12) 兄上さまに御意見があればお教えください。(ピアノ：201)
(13) 文句があるならそで言え。(いそっぷ：19)
(14) もし、気の進まない者がいたら、いま立ち去ってくれ。(かば：67)

ここでは、「評価副詞」を使ったテストで、モダリティスコープを判定する。評価副

詞とは、命題をどのように評価しているかを表す「あいにく、幸いにも」などの副詞で、(15)のように判断のモダリティとは共起できるが、(16)のように実現期待のモダリティとは共起できないという統語的特徴を持つ。

(15) 幸いにも、彼は回復するかもしれない。(判断のモダリティ)

* (16) 幸いにも、回復してください。(実現期待のモダリティ)

しかし、(17)のような文では、主節末に実現期待のモダリティをとりながら、文法的に許容度の落ちる文にはならない。

(17) 幸いにも私のお願いをきいてくださるなら電話をしてください。

このように、複文になると主節末のモダリティ制限がなくなるのは、(17)が、主節末のモダリティが主節の命題だけにしか及ばない β 構造をもつ複文であるからではないだろうか。(18)のように α 構造をもつ場合は、複文であっても、(16)と同様に許容度が下がる。

* (18) 幸いにも／あいにく「食事をしながら話し」まじょう。

以上の観察から、この仮定条件のカテゴリーに属する複文は、主節末に判断のモダリティがついた時は α 構造、実現期待のモダリティがついた時は β 構造になるといえる。

7. 2. 3 時

まず、判断のモダリティが主節末についた場合の構造を見る。

(19) (花子は他の子供に比べて少し言葉の遅いのが気になる。しかし、)

「二才の誕生日を迎えたら、花子も話し始める」にちがいない。

(20) 「太陽があの山の向こうに沈むとねぐらを求める鳥達がこの森に帰ってくる」が
もしれない。

これらの例文は、従属節の命題が成立しなかった場合の事が想定しにくい、いわゆる規定条件と呼ばれているものである。 $p \rightarrow q$ という条件関係が希薄になり、従属節の事態の完了を時間の起点として主節の事態が発生するという関係の意味が生まれる。その点で「二才の誕生日を迎えたトキ」のような「トキ節」に近い性質を担う。これらは「 p が、 q 成立の為の条件の中でも、特に q の事態発生の時間的な条件として働く」という意味特徴をもつ。このように、時間的条件というものを広く条件に含めると、上記の例も、 $p \rightarrow q$ という論理の流れを持ったひとまとまりの命題を主節末のモダリティが後ろから包含する α 構造と捉えられる。

次に、実現期待のモダリティが主節末についた場合の構造であるが、これらも7. 2. 2の仮定条件の場合と同様、例(22)のように、評価副詞のテストで文の許容度に変化が見られないことから β 構造をもつと判定できる。

(21) 雨が降ってきたら「この傘を使い」なさ。

(22) あいにく雨が降ってきたら「この傘を使い」なさ。

(23) 荷物おいたら、「庭へおい」でよ。(太郎：135)

7. 2. 4 「理由」及び「発見契機」

- (24) 薬を飲んだら頭痛が治りました。(接続:3)
 (25) 先生に注意されると、学生はおしゃべりをやめた。(接続:7)
 (26) 海に泳ぎに行ったら、波が高くて遊泳禁止だった。(接続:3)
 (27) 友達を見舞いに病院に行くともう退院していました。(接続:7)

「理由」(例(24)(25))及び「発見契機」(例(26)(27))のカテゴリーに属するのはそれぞれ上記のような例文であるが、これらの主節末はいつも過去形のため、構造判定はできない。

7. 2. 5 慣用表現

- (28) 思えば[あの子も大きくなった]もんだ。
 (29) ところが女の子共ときたら、[揃いも揃って油から煙が出そうになるほど熱くすることに罪悪感を覚えている]だ。 (太郎:228)
 (30) だから、よかったら[遊びに来]てね。 (太郎:178)

このカテゴリーに属する従属節は、(28)のように主節末の回想や感嘆のモダリティと対応するように副詞的に機能するものや、(29)のように「女の子共は」のような堤題表現と通ずる機能をもつもの等、様々である。また、従属節は形態的には条件を表すようでありながら、実質的には「従属節命題が主節命題に対する何らかの条件を表す」という意味関係が非常に希薄である。従ってこれらの複文は、主節末に判断・実現期待のどちらのモダリティがついても、そのスコープが従属節の命題に及ばない β 構造になると判定できる。

7. 2. 6 発言のモダリティ

- (31) 明るいほがらかなという聞こえがいいが、はっきり言うと、[どうもにぎやかすぎる青年である]。 (Integrated:132)
 (32) はっきり言え、[僕たちは、もし孤児だったら、ずいぶんうまく行ってたと思]。 (太郎:243 一部改 原文は「思うんだ」)
 (33) うがった言い方をするなら、[おびただしい新興宗教の誕生は、既存の宗教に対する宗教革命であるということが言える]かもしれない]。

このカテゴリーに属する複文も、「従属節の命題が主節の命題に対する条件を表す」という条件節の典型的な意味関係をもはや担わない。これらは、三上(1959)で「発言のムウド」、中右(1980)で「発話行為の副詞」と呼ばれているもので、節の命題が命題としては機能せず、従属節が「主節をどのような態度で発言するか」という副詞的なモダリティ成分となるものである。従って、主節末にどんなモダリティが位置しても、これらは β 構造になると判断できる。

7. 3 条件節の構造パターン

以上、7.1で分類した条件節の複文が、主節末のモダリティのスコープによってどのような構造パターンを示すかを観察した。これを表にまとめると次表2のようになる。

	① 恒常条件		② 仮定条件		③ 時		④ 理由		⑤ 発見契機		⑥ 慣用表現		⑦ 発言のモダリティ	
バ	α^*	×	α	β							β	β	β	β
タラ			α	β	α	β	?	×	?	×	β	β	β	β
ナラ			α	β									β	β
ト	α^*	×			α	β	?	×	?	×	β	β	β	β

表 2

(同じ番号①～⑦内で点線の左が判断、右が実現期待のモダリティを付けた時の構造)

α/β = 主節末に当該のモダリティがついて α 構造 / β 構造になるもの

α^* = 確言のモダリティしか位置できないという制限あり

×

× = 当該のモダリティが位置できないもの ? = 構造の認定ができないもの

上記のマークなし = 各形態を使って当該のカテゴリーに属する文が成立しないもの

表 2 から、①の恒常条件から⑦の発言のモダリティに移行するにつれて、構造の分布が α から β に変わっていくことがわかる。つまり、この順番で従属度が低くなっていくと考えられる。(注 4) このように、形態的には 4 種類の条件節も、その実現する関係の意味を中心に幾つかに分類すると、それらが少しずつ異なった従属度を持つことが明らかになった。本稿では、5 節で掲げた様に、条件節以外でも、同形態で意味的に下位分類した接続辞があるが、本節で述べた条件節の例は、同じ形態でも実現する関係の意味の違いによって、従属度の連続的なスケールに於ける位置が異なる可能性を示唆している。

8. 意味的基準による複文の構造

条件節については、7 節のように構造を判定したが、この他の複文についても、各接続辞毎に評価副詞や否定辞の焦点位置等のテストを行い「意味的基準」による構造の分布を判定した。これらを詳しく説明するには紙幅が限られている為、結果のみを以下に示す。

- (ア) 判断のモダリティが α 構造で、実現期待のモダリティを主節末にとらないもの。
.....バ・ト (恒常条件)
- (イ) 判断のモダリティ・実現期待のモダリティともに α 構造をとるもの。
.....ナガラ 1、ナイデ、ツツ、連用形反復、連用形 1、テ 1 (付帯状況)、ズ (ズニ)
- (ウ) 判断のモダリティが $\alpha \cdot \beta$ 両方の構造を持ち、実現期待のモダリティが α 構造のみをもつもの。
.....ナガラ 2・テ 2 (継起)
- (エ) 判断のモダリティが α 構造、実現期待のモダリティが β 構造をもつもの
.....バ・タラ・ナラ (仮定条件)、タラ・ト (時)、テモ
- (オ) 判断のモダリティが β 構造で、実現期待のモダリティを主節末にとらないもの。
.....テ 3 (理由)、連用形 2 (理由)、シ (並列)
- (カ) 判断のモダリティ・実現期待のモダリティともに β 構造をとるもの。
.....ノデ、ノニ、カラ、ガ (逆接・前置き)、ケレドモ (逆接・前置き)、シ (理由取り立て)、バ・タラ・ト (慣用表現)、テ 4 (並列)
- (キ) 従属節全体が主節のモダリティ成分になってしまうもの
.....バ・タラ・ナラ・ト (発言のモダリティ)、テ 5 (発言のモダリティ)

9. モダリティスコープと従属度との関係

8節では、モダリティスコープの意味的基準を構造判定基準として測定した結果をまとめた。次に表3ではこの「意味的基準」から測定した従属度と、4節で述べた「形態的基準」から測定した従属度との関係を同じ表に示した。(注5)

この表から、「形態的基準」から判断した構造と、「意味的基準」から判断した構造との間に関連があることがわかる。つまり、節末に位置できるモダリティの種類と数が多くなるほど、 β 構造の分布が多いパターンが現れているのである。従って、両節末に位置できるモダリティの種類と数、及びモダリティスコープによる複文の構造との間には関連があり、この結果の一致から更に、この①と②④を両端とした各複文の配列が、連続した従属度の高低のスケールを表していることが予測できる。

	接続節	形態的基準				意味的基準
		従属節末のモダリティ		主節末のモダリティ		(本稿8節参照)
		判断	実現期待	判断	実現期待	
①	ト・ハ (恒常条件)	△*	x	▲	x	(ア)
②	ナガラ1	x	x	○	○	(イ)
③	ツツ	x	x	○	○	(イ)
④	連用形反復	x	x	○	○	(イ)
⑤	連用1 (述語adj)	x	x	○	○	(イ)
⑥	テ1 (付帯状況)	x	x	○	○	(イ)
⑦	ナイデ	x	x	○	○	(イ)
⑧	ズ・ズニ	x	x	○	○	(イ)
⑨	ナガラ2	x	x	○	○	(ウ)
⑩	テ2 (継起)	x	x	○	○	(ウ)
⑪	タラト (時)	x	x	○	○②	(エ)
⑫	ハ・タラト (慣用表現)	△	x	○	○②	(カ)
⑬	タラ・ナラ・ハ (仮定条件)	△	x	○	○	(エ)
⑭	テモ	△	x	○	○	(エ)
⑮	連用形2 (理由)	△	x	○*	x	(オ)
⑯	テ3 (理由)	△	x	○*	x	(オ)
⑰	ノニ	△	x	○	△	(カ)
⑱	ノデ	△	x	○	○	(カ)
⑲	シ (並列)	○	x	○	x	(オ)
⑳	テ4 (並列)	○	x	○	○	(カ)
㉑	ガ (逆接)	○	x	○	○	(カ)
㉒	シ (理由取り立て)	○	x	○	○	(カ)
㉓	カラ	○	x	○	○	(カ)
㉔	ケレドモ (逆接)	○	x	○	○	(カ)
㉕	ガ (前置き)	○	x	○	○	(カ)
㉖	ケレドモ (前置き)	○	x	○	○	(カ)

表3



○→当該のモダリティが位置できる x→当該のモダリティが位置できない
 ○*→希望のモダリティ「タイ」のみ位置できない ○②→「ト」にのみモダリティ制限有
 Δ →位置できるモダリティの種類に制限がある \blacktriangle →確言のモダリティのみ位置可能
 Δ^* → Δ より更に制限が強く、接続辞「ト」の場合のみ確言のモダリティだけが位置可能

では、次に、本稿と南(1974)との結果を対照する。主に8節の結果に注目し、構造の分布に関してこれらの複文を大きく三つに分類する。 α 構造の分布が多い(ア)・(イ)・(ウ)をⅠ類、また、 β 構造の分布が多い(オ)・(カ)・(キ)をⅢ類とする。Ⅰ類とⅢ類の中間的な分布を見

せる(エ)をⅡ類とする。この分類と南(1974)の分類を対照したものが以下の表4である。

	本研究の分類		南(1974)の分類
ナガラ1・ツツ・連用形反復 テ1・連用形1	(イ)	Ⅰ類	A類
トノバ(恒常条件) ナイデ・ズ(ズニ) テ2・ナガラ2	(7) (イ) (ウ)		B類
タラ・ト(時)・ バノタラノナラ(仮定条件)・テモ	(エ)	Ⅱ類	
テ3・連用形2 バノタラノト(慣用表現)・ノデ・ノニ	(オ) (カ)	Ⅲ類	C類
シ(並列) ガ・ケレドモ(逆接・前置き)・テ4・ シ(理由取り立て)・カラ	(オ) (カ)		

表4

表4から、本稿での分類と南(1974)との分類が、大まかなところでは対応した関係にあることがわかる。しかし、細かい部分に差異が見られる。本稿では、条件節を形態上からではなく意味的に下位分類した結果、の部分のように、形態は同じでも実現する意味の違いによって、従属度に差が見られるものがあることを指摘した。また、部のナイデ・ズ(ズニ)なども、南(1974)で述べられているより従属度の高い形式である可能性がある(南(1974)では、B類と分類されている)。南(1974:130)には「A類の従属句には打ち消しの要素は現れないと述べたが、～ズニ、～ナイデの形の句が～ナガラ(継続)の中に含まれる例がある。」という指摘がある。紙幅の都合上詳述できないが、「ナイデ」という形式は従属度の高いテ形(テ1)と対応する側面があり、南(1974)で考察されたものより高い従属度を持つ「ナイデ」があるようである。「ナイデ」の様々な用法と従属度に関しては、更に従属度のスケール上のより正確な位置を検証する必要がある。

10. 接続節の形態と意味

本稿では、モダリティのスコープという観点から従属度を測定し、表3のような結果を得た。この結果を考察すると、従属度のスケール上に並ぶ複文の節と節の間には下記のような意味的なまとまりがあるのではないか、ということに気づく。



このスケールの右端に、節としての形態を取りながらモダリティ成分として機能する「発言のモダリティ」を置く。更にテ1～5を「テ形節」、タラ・バ・ナラ・トを「条件節」、ノデ・カラを「理由節」、ガ・ケレドモを「逆接節」、シを「並列節」とグループニングし、これらの形態と実現する意味のまとまりとの対応を示すと、次表5のBの部分のようになる。

接続節の複文の従属度と形態・意味・機能の相関 表 5

この表で、従属度のスケールに沿う形で意味のまとまりが観察され、そのまとまりのいくつかは、テ形節や条件節等が同一の形態を持ちながら様々な関係の意味を実現して所属していることがわかる。このことは、形態的には同一でも、それが実現する節と節の関係の意味や、節が文の中で果たす機能によって従属度は変化するということを示している。

と考えられる。更に言えば、形態的には異なる接続辞を使って節をつないでできた複文でも、従属節と主節の命題がつくる関係の意味が類似したものであれば、従属度も同等なものに近づく可能性があるのである。

「意味」は「形態」ほどはつきりした形では現れず、しばしば主観性が前面に出る為、それを従属度を測る唯一の基準とするには躊躇されるところがある。しかし、節同士の機能・形態・意味を別々に捉えるのではなく、それぞれの有機的なつながりを観察し、包括的に従属度を捉えていくことが、更に精密な記述に向けて望まれるのではないだろうか。

1.1. 従属度を方向付ける要因

最後に、以上で述べた様な意味のまとまりが存在する背景にある要因を考えたい。本稿では、連続的に変化する複文の従属度を、以下のように節間の機能的・意味的な関係を反映したものであると考える。

- (あ) 機能：複文全体の中で、従属節が主節に対して担う文法的機能
- (い) 意味：い1 各節の命題間の論理関係の有無
 い2 各節の命題の述語の事態が生起する時間関係の有無

(あ)の「機能」とは、従属節が主節のどんな成分として機能するか、という点である。この観点から、本稿で対象とした複文の従属節は、「付帯状況」から「前置き」まで、及び「発言のモダリティ」に二分される。「付帯状況」から「前置き」までの従属節命題は、複文全体の命題を形成する一部分として機能している。一方、「発言のモダリティ」では、従属節命題が複文全体の命題の一部とはならず、主節全体にかかる副詞的成分となっている。また、「付帯状況」から「前置き」は、更に、従属節命題が主節命題とどのような関係にあるか、という点で2つに分けられる。「付帯状況」は、従属節命題が主節命題に対して、主節の事態進行の背景として副詞的に機能している。一方、「継起」から「前置き」までの従属節命題は、主節との関係の仕方は様々であるにせよ主節命題に対して命題として対等な関係に立っている。

このように本稿では「従属節の複文全体の命題形成への関わり方」が従属度を決定する一つの要因になっていると考える。従属度が高い場合は、従属節命題は主節命題に依存して複文全体の一つの命題を形成する方向に機能し、従属度が低くなると従属節命題は命題という機能を果たさず、主節を包み込むモダリティ成分として機能するのである。

次に、(い1)の従属節と主節の命題間の論理関係の有無であるが、「仮定条件・理由・逆接」以外には節の命題間に「条件」や「因果・理由帰結」や「逆接」のような論理関係は存在しない。しかし「並列」には、寺村(1992)で「統括命題」とよばれている、並列される要素をまとめあげる、ある一つの共通する大きな命題の存在が考えられる。

(い2)は、従属節・主節のそれぞれの命題の述語の事態の生起する時間関係や、順序関係に注目したものである。「付帯状況」から「理由」までは、時間関係や順序が存在する複文であり、「逆接」より右は、それらが義務的ではない複文である。

ここから、従属度が低くなると、言語の「線条性」から生じる「従属節の事態が生じ

ってから主節の事態が起こる」という時間の流れに沿った順序関係から解放されることがわかる。この、述語の事態発生に関わる時間関係は、述語の動作性／状態性の別及び意志性に関わる問題であり、従属度と述語の種類には関係が認められることが推測されるが、詳しい考察については稿を改めなければならない。

また「付帯状況」から「仮定条件」までは、更に「従属節命題の事態と主節命題の事態に時間的な重なりのあるもの（付帯状況）」と「従属節命題の事態が完全に終了してから主節命題の事態が生起するという順序関係を持つもの（継起）」、そして「論理関係に支えられた事態の順序関係を持つもの（仮定条件・理由）」（注6）に三分される。これは「命題の世界にある事態を、どう切りとるか」という問題に関係すると思われる。つまり、最も従属度が高い「付帯状況」は、例えば、同時に進行する複数の動作を一枚の絵で表したものである。これに対して従属度のスケールの中寄りに位置し、事態発生の順序を持つ「継起」は、複数の動作をその数だけ別々の紙に絵で表現し、順番に並べたものである。時間関係は、命題同士を「一つの絵のように分かち難く緊密に関係したもの」と捉えるか、「順番に並べられた複数の絵のように切り離せる、相互が比較的独立したもの」と捉えるか、という命題相互の従属関係に深く関わっているのである。また、先に述べた（い1）の論理関係は、この時間関係と無関係ではなく、二つの絵を論理的に順序づける等の方法で相互に関連しあって、節同士を結び付けていると考えられる。

本稿では、本節で述べた機能的・意味的要因が、10節表5のAの部分のように相互に関係して連続的な従属度のスケールを作り出すと考える。

12. 結語

本稿では、主節末のモダリティのスコープの広狭が、複文の従属度を反映していることを主張した。また、その観点から、南(1974)で述べられた複文の従属度を検証した。更に、連続的な従属度のスケール上に並ぶ複文の意味的なまとまりを指摘し、従属節と主節が実現する「意味」と「従属度」との関係述べた。最後に、その従属度と意味との関連を方向付ける機能的・意味的な要因を考察した。本稿では、これらの要因を「従属度を方向付けるもの」として掲げるにとどまったが、これらが、節のテンス・アスペクトや述語の意志・無意志性といった構文上の現象としてどのように現れるかについては、更なる観察が必要である。今後はそれらの要素も考察の対象に含め、様々な観点から有機的に従属度を観察して行きたい。

1. テ形については部分的に分類の意味的ラベルを変えて考察した（下線部のテ1～テ5をテ形の意味を表す呼称として使用）。テ2につけた意味的なラベルは、南(1974)とは異なる。また、南(1974)でC類とされているテ4及び連用形3については、考察を行わなかった。但し、テ4・テ5は「並列」と「発言のモダリティ」という新たにラベリングした分類を立て考察した。
2. ただし、(a)の「ワケダ・ノダ」は主節末に位置した場合、前接する部分をひとまとめにして名詞化する働きがあるため、主節末に位置するモダリティとしては、考察の対象から除く。「モノダ」等、名詞化の働きを持つ他のモダリティも、モダリティとして本来の用法（回想・感嘆を表す、等）で使われているもののみを扱った。また、(b)の希望を表すモダリティ「タイ」は、(a)と(b)の中間的な性質を持つため、従属度をはかる指標としてモダリティを用いる時は、(a)の判断のモダリティに属するものとして考察する。
3. 表中○は、当該のモダリティが付くことができ、×はできないことを表す。モダリティの種類が書いてある場合は、書かれてあるモダリティしか位置できないことを表す。△は、位置できるモダリティの種類が限られていることを表す。例えば、命令・依頼・禁止等のモダリティは⑦の発言のモダリティと共起できない。
4. ただし、②「仮定条件」と③「時」は、 $\alpha \cdot \beta$ の構造パターンが同じ為、この時点ではこの二つの従属度の高低は判定できない。
5. 表中にある接続節の数は、5節で示した下位分類等により、南(1974)であげられた接続辞の数より多くなっている。また、主節末がいつも過去形でモダリティスコープによる構造判定ができないもの（条件節の「発見契機」等）は表3には掲げられていない。
6. 「仮定条件」の節間にある時間の順序関係は、接続辞「ナラ」を使った場合、主節→従属節という順番もありうる。（「友達の所へ行くなら、このケーキを持って行きなさい」のようなもの。）しかし、「仮定条件」という関係的意味を実現させるそのほかの接続辞においては、従属節→主節の順序関係が一般的である。
 また「理由」の節間にある時間の順序関係は、「継起」の時間関係とは異なり、「来月子どもが入学するので、今日からパートの仕事を始めます」の様に、主節→従属節ということも有り得る。一般的に理由節が従属節→主節の順序をとるのは、「原因は結果に先立つ」という命題間の論理関係に起因すると考えられる。但し、主節事態が生起することを認識した為に従属節事態が引き起こされる、という原因→結果の順番はこの場合も保持されている。

参考文献

- 金田一春彦 1953 「不変化助動詞の本質 主観的表現と客体的表現の別について」
『国語国文』22.2~3 京都大学国文学会
(『日本の言語学』3:207-249.に再収 1978年 大修館書店)
- 田窪 行則 1987 「統語構造と文脈情報」『日本語学』6.5:37-48. 明治書院
- 寺村 秀夫 1984 「並列的接続とその影の統括命題 モ、シ、シカモの場合」
『日本語学』3.8 明治書院
(『寺村秀夫論文集』I:337-347.に再収 1992年 くろしお出版)
- 豊田 豊子 1985 「「と、ば、たら、なら」の用法の調査とその結果」
『日本語教育』56:51-64. 日本語教育学会
- 中右 実 1980 「文副詞の比較」国広哲弥(編)『日英語比較講座』2:157-219.
大修館書店
- 仁田 義雄 1991 『日本語のモダリティと人称』 ひつじ書房
- 林 四郎 1960 『基本文型の研究』 明治図書
- 三上 章 1959 『新訂版 現代語法序説 主語は必要か』 刀江書院
(『統現代語法序説 主語廃止論』1972年 くろしお出版より復刻
本文引用は復刻版から)
- 南 不二男 1974 『現代日本語の構造』 大修館書店
- 1994 『現代日本語文法の輪郭』 大修館書店
- 渡辺 実 1953 「叙述と陳述 述語文節の構造」『国語学』13~14 国語学会
(『日本の言語学』3:261-283.に再収 1978年 大修館書店)

用例出典

- 「ココア」 : 「孤独な夜のココア」 田辺聖子 新潮文庫
- 「ピアノ」 : 「ピアノ協奏曲二十一番」 遠藤周作 文春文庫
- 「セーラー」 : 「セーラー服と機関銃」 赤川次郎 角川文庫
- 「太郎」 : 「太郎物語 高校編」 曾野綾子 新潮文庫
- 「いそつぶ」 : 「未来いそつぶ」 星新一 新潮文庫
- 「かぼ」 : 「かぼちゃの馬車」 星新一 新潮文庫
- 「Integrated」 : 「Integrated Spoken Japanese II」 高木きよ子、大坪一夫、水谷修、
他編 アメリカ・カナダ大学連合日本研究センター
- 「接続」 : 「接続の表現」 横林宙代・下村彰子 荒竹出版

The Degree of Dependence in Complex Sentences in Relation to the Scope of Modality in Main Clause

This paper clarifies the degree of dependence between main and subordinate clause in complex sentences that have some types of conjunctive phrases between the two clauses, and describes the elements which determine the degree.

Twenty-four types of complex sentences similar to those in Minami(1974) were examined. The scope of modality in main clause was chosen as a criterion for the degree of dependence.

Following this criterion, the structures of the complex sentences were categorised as α -structures and β -structures. In the α -structure, the modality of the main clause has scope not only over the proposition of the main clause but over that of the subordinate clause. In the β -structure, the modality of the main clause has scope only over the proposition of the main clause. The degree of dependence is high in α -structure, whereas it is low in β -structures.

Based on these structures, complex sentences are classified into three groups.

The judgement of the degree were basically in accord with Minami(1974)'s research. However, my research shows that the semantic and functional relationships between the clauses are important in determining the degree. The semantic relations between the clauses are (1)temporal order and (2)logical sequence. The functional relations are in terms of whether the subordinate clause (1)behaves like adverbial clause, (2)retains its status of clause, or (3)functions as a modality.

This research also shows that as far as semantic and functional relations are different, the degree is different even if the sentences share the same conjunctive phrase morphologically.